白山ふるさと文学賞

第十四回　白山市ジュニア文芸賞　受賞作品

【島清部門】

中高校生　小説の部　最優秀賞

「空に奏でる」

美川中学校一年　出原（ではら）　愛（あい）

今年の夏は去年に比べて一段と暑かった。吹き出しては止まる気配のない汗をぬぐいながら、奏はため息をついた。
「詐欺じゃん、こんなの。そらもそう思わない？　文化部だし、もっと楽な部活かと思ってたのに。」
そらと呼ばれた空宙乃も、額に汗をかいている。
「分かる～。でも、全国大会で金賞狙ってるって言うんだから、しかたないよねぇ。」
暑さのわりにどんよりと曇った空を見上げて、顔をしかめるこの二人は小学校からの大親友だ。
同じ部活に入った二人だが、毎週土日の一日練習にはうんざりしていた。

事の発端は、中学生になって間もなく行われた部活動紹介だ。
まだ生地が張っていて着慣れない制服に袖を通した奏と空宙乃は、体育館に座って部活動についての説明を受けていた。
「バレー部、サッカー部、陸上部、美術部、吹奏楽部、茶道部か……。」
「どれもなんだかピンとこないよねぇ。」
二人とも同じ部活に入りたいと思っていたのだが、いざ決めるとなるとこれといって入りたい部活はなかった。
「仕方ない、適当に楽そうな部活に入ろう。」
奏が半ば諦め気味にそうこぼすと、
「あれ、待って奏！　説明だけじゃなくて、実技も見せてくれるみたいだよぉ。」
長ったらしい説明を退屈しながらぼんやりと聞いていた奏は、思わず目を見開いた。
「ほら見て、すごい！　あんなに高くボールを蹴ってるよぉ。」
サッカー部の実演に続いて、バレー部が華麗なアタックを決めたり、陸上部が驚異のスピードで腕立て伏せをしたり、美術部が描いた絵を見せたりしていた。
説明のときとは打って変わって、新入生たちは目を輝かせて先輩たちを見つめていた。
そんな実演もそろそろ終盤に差し掛かろうとしたとき、吹奏楽部が演奏の準備をし始めた。
「今日は、吹奏楽部を代表して、三つの楽器を演奏します。聴いてください。」
初めにフルートの演奏が始まった。
胸の奥深くにまっすぐ入り込んでくる柔らかな音色。それでいて全くぶれることのない、美しい凛とした音だった。
奏も、空宙乃も、息をのんだ。それから食い入るように身を乗り出して、演奏に聴き入った。
次の演奏は、トランペットだった。
鳥肌が立った。今にも心臓の鼓動が聞こえそうなほど、胸の奥が震えていた。
「すごい……。」
思わず声が漏れた。
「だねぇ。さすが先輩。」
隣の空宙乃も目を輝かせている。最後のドラムの演奏披露が始まる頃には、もう奏の心は決まっていた。声に出さなくても、空宙乃も同じ気持ちでいるのだろうということは分かっていた。「吹奏楽部に入って、こんな演奏ができるようになりたい。」と。
「初めての部活、ついに明日からか。」
奏は、担任から渡された入部届に一字一字丁寧に記入しながら、新しく始まる部活動への期待を膨らませていた。
そして待ちに待った部活動組織会。奏と空宙乃は胸を高鳴らせて廊

下を歩いていた。
「いよいよ始まるねぇ。私、フルートやりたいんだよね。すごい楽しみ！　でも、めちゃくちゃスパルタだったらどうする？」
「いやいや。文化部だし一年生だし、それはありえないでしょ。」
そう言って笑いあっているうちに、教室に到着した。
奏がドアを開けると、ほとんどの一年生がそろっていた。
「危ない、遅刻かと思っちゃったぁ。」
奏の後ろから顔をのぞかせて、室内を見渡しながら空宙乃が言った。
教室に二十脚ほど並べられた椅子に適当に腰掛けたところで、顧問の先生が入ってきた。
四角くて細い銀縁眼鏡をかけた三十代くらいの男の先生だった。ワックスで固めた髪に痩せた体、細い目をさらに細めて常に笑顔を浮かべている。それなのに、明るいというよりはどこか冷たい印象を受けるのが不思議だった。
少し騒がしくなった教室内が静かになるまで待って、先生は笑みを浮かべたまま話し始めた。
「吹奏楽部顧問の菅原です。平日は基本的に毎日十九時まで活動します。土日は八時から十九時までありますので、各自弁当の準備をお願いします。」
静まり返った教室の中で、奏だけが思わず声を漏らしてしまった。
「え、嘘でしょ……。」
顧問の菅原が奏の方を一瞥したが、笑みを崩さぬまま続けて話しはじめた。
しかし、混乱する奏の耳には、もう菅原の声は届いていない。
え……毎日あるってことだよね。しかもそんなに夜遅くまで？　嘘でしょ。嘘って言って！
奏の心の叫びもまた、菅原には届くはずもなく、話を終えた菅原は、相変わらず感情の読めない冷たい笑みを浮かべたまま、最後に一言こういった。
「吹奏楽部へようこそ！」
帰り道、菅原の言葉にショックを受けた奏は、肩を落としながらとぼとぼと歩いていた。
「どういうこと!?なんでみんなあんなに冷静なの？」
空宙乃は、
「そんなこと言われても。そらだって分かんないよぉ。」
と、困り顔をしている。
すると先ほどの組織会で、隣の席に座っていた女の子が後ろからやってきて、
「帰り道同じ方向やったんや。」と、声をかけてくれた。そして続けて、
「なんでそんなに動揺してるん？　部活紹介んときも説明しとったやんか。本気で全国目指すって。」
と、やや早口な関西弁で言った。
二人は目を見開いて顔を見合わせた。
「そういえばあの時、長い上につまらない話に退屈してて、説明はあんまり聞いてなかったような……。」
「ちゃんと話は聞きや～。ほなまたな！」
そう言ってその子は走っていってしまった。
「あっ、名前聞き忘れちゃったぁ。」
空宙乃はそう言って、もう頭は切り替わっているようだったが、奏はそんなに大変な部活でやっていけるかという不安を拭えないまま、夕日に照らされて長く伸びた自分の影を見つめていた。
次の日の部活動から、さっそく楽器決めが始まった。顧問の話が終わると、三年生の先輩が、右も左も分からない奏たち一年生につきっ

きりで教えてくれる。
　先輩が書いてくれたホワイトボードに目をやると、金管はトランペット、ホルン、ユーフォニアムなどがあり、木管はフルート、サックス、クラリネットなどがあった。
「お姉ちゃんがやってたからフルートがいいなぁって思ってるんだよねぇ。」
　空宙乃は、先輩の演奏を見ているときと同じように、目を輝かせて言った。
「確か空宙乃ちゃん、だよね。フルート吹いてみる？」
　部活動紹介の実演で、とんでもなく上手にフルートを吹いていたあの琴音（ことね）先輩に声をかけられて、空宙乃はフルートの体験をすることになった。
「じゃあフルート吹いてくるねぇ。奏も一緒にくる？」
　気を遣って空宙乃が聞いてくれたが、奏は首を横に振った。
「いや、私はいいよ。頑張ってきてね。」
　正直に言うとフルートのような花形楽器に憧れてはいたのだが、いざ自分が演奏することを考えるとミスが目立ちそうで怖かった。
「裏方楽器だから……ホルンかユーフォニアムにしようかな。」
「なぁ、あんたも金管やるん？　うちはホルンやりたいねん。」
　声をかけてきたのは、響（ひびき）と名乗る同じ帰り道のあの子だった。
「一緒に金管パートの部屋行こうや。」
　響に言われるままについていくと、
「金管志望の子だよね？」
と、笑顔で先輩たちが近づいてきた。
　そして金管楽器特有のマウスピースという、円錐形で先端が少し広がったものを渡された。
　金管楽器は、このマウスピースに息を吹き込み、音を出す仕組みになっているらしい。
「すぐそこにあるから水道でマウスピース洗ってきて。」
　そう言われて廊下を右に曲がると水道があった。
「奏って呼んでもええよな。うちはホルン希望やねんけど、奏は何やるん？」
「まだ決めてないけど、ミスが目立たない裏方的な楽器がいいかな。」
　そんな会話をしながらさっきの部屋に戻ると、先輩たちがマウスピースを唇に当てて音を出していた。
「すごい、マウスピースだけでもこんなに響く音が出せるんだ。」
　奏は椅子に座るとマウスピースを唇に当てて、思いきり息を吹き込んだ。
「ひゅぉぉぉ……。」
　奏のマウスピースから漏れ出た音は、先輩とは比べ物にならないほど弱々しかった。
　あまりの差に思わず先輩の方を見ると、目が合った先輩は、
「ホルンはね、世界で一番難しい金管楽器ってギネス記録に登録されてるんだよ。始めたばかりだし、最初はできないのが当たり前。だから焦らなくても全然大丈夫だよ。」
と、茶色みがかったさらさらのボブヘアーの毛先を少し揺らしながら、笑顔で言ってくれた。
「そうなんですね！」
　少し安心した奏が隣を見ると、今度は響が吹き始めた。
「ブゥゥゥ！」
　先輩には全く敵わないが、奏よりは圧倒的に響の方が良い音だった。
　初心者同士のはずなのに、こんなに差が出るものだろうか。衝撃を受けた奏はもう一度吹いてみたが、結果は何一つ変わらなかった。
　すると先輩は奏の隣に座って吹き始めた。
「ブゥゥゥゥゥゥ！！」

思わず隣に視線を向けると、先輩はこう言った。
「奏ちゃんは息を吸うとき、肩が上がってるでしょ？　それじゃ駄目なの。」
力いっぱい息を吹き込むと、どうしても肩が上がってしまう。混乱しかけた奏に先輩は続けた。
「胸式呼吸じゃなくて腹式呼吸を使うの。」
言われた通りにおなかに力を入れてまたもや力いっぱい息を吹き込むと、
「ブゥゥゥ！」
今度は響と同じ音が出た。あまりの嬉しさに頬を紅潮させた奏に、響が若干唇を尖らせて声をかけた。
「やったやん、でもうちだってそう簡単には負けへんからな。」
マウスピースは窓から差した陽光を反射してきらりと光っていた。

それから空宙乃と合流した奏は、ホルンをやろうと思っていることを打ち明けた。
「ホルンかぁ。じゃあそらも奏と一緒なのがいいから、ホルンにしようかなぁ。」
二人が一緒なのはいつも通りのことなのに、何故か奏は違和感を覚えた。
「それほんとに言ってるの？　そらはそれでいいの？　フルートじゃなくても？　三年間やるんだからね、ちゃんと考えてよ。」
想像とは違う反応が返ってきて戸惑ったのだろう、空宙乃は首を傾げた。
「奏？　同じパートになるって約束したじゃん。別にホルンでもそらは気にしないよぉ。」
「別に気にしないって何？　そらの本当の気持ちはどうなのって聞いているの。そらってさ、昔からそういうところあるよね。そういうのが嫌なんだよね！」
思わず出てしまった強い言葉に、自分で驚いたのも束の間。気が付くと足が勝手に動き出して空宙乃に背を向けて走り出していた。
やってしまった。これまでもずっと、奏が何か言えば空宙乃は大体それに従ってくれるし、何があってもずっと傍にいてくれた。こんな風になったのは初めてだ。
空宙乃が単純に自分との関係を大切にしているから言ってくれたのだということは分かる。しかし、本当の友達というのは、きっとそういうのとは違う。奏は、感情的に突き放した言い方をしてしまったことを後悔していたが、空宙乃が本当にやりたい楽器を選べるように、しばらくは仲直りをせずにいようと思った。
そうは言っても、簡単に割り切ることはできず、自分の判断が本当に正しいのか、空宙乃との関係が修復不可能なレベルにまで崩れてしまわないか、悶々と考え続け、その日は布団に入ってもなかなか眠れず、やっと眠りについたのは、夜明けが近づいてきたころだった。

次の日から希望の楽器ごとに分かれての練習となった。奏は、空宙乃がホルンパートの練習にいるかどうか、教室のドアを開けるまで不安だった。もし空宙乃がいたらどうしようと思っていたが、ホルンの教室に、一年生は響しかいなかった。
奏はほっと胸を撫でおろした。きっと空宙乃は自分の気持ちの通りフルートを選んだのだろう。
「やっぱり奏もホルンにすんねんなあ。うち、絶対負けへんからな。」
ライバル心むき出しの響に、思わず吹き出してしまった。
「うん、一緒に頑張ろうね。」
拍子抜けしたような響だったが、すぐに笑顔になって、今日から一人一人に貸し出されるホルンを大切そうに磨いていた。

それからは、組織会で菅原が話していた通り、猛練習の日々が始まった。学級の終礼が終わると、ダッシュで音楽室に向かい、すぐにそれぞれのパート練習に分かれて、先輩からの厳しい指導を受けた。

下校時刻寸前までパート練習が続くので、必然的に同じ方向の響と帰ることになり、空宙乃と顔を合わせることはあっても、あの日のことについて詳しく話す機会はなかった。

いや、作ろうと思えばいつだって空宙乃と話す時間は作れたはずだ。しかし、奏は話しかける勇気を持てずにいた。空宙乃を傷つけてしまったのではないか。もう自分のことを嫌っているのではないか。考えれば考えるほど、悪い方ばかり想像は膨んでしまう。

しかし、ホルンを吹いている間だけは悩んでいることも忘れられた。奏は、空宙乃との関係から目を逸らすように部活にのめりこんでいった。

そして、空宙乃との関係を修復できないまま月日は流れ、一年生にとっては初めてのコンクールで、三年生にとっては全国大会に向けた第一歩となる市のコンクールの日が近づいてきた。

ホルンパートは二年生がおらず、一年も奏と響しかいなかったため、二人ともコンクールメンバーに選ばれた。

「いよいよだね、コンクール。ああ、緊張するなあ。」

「何言うてんねん。いっつもうちよりほめられとるくせに。」

奏は、これまで部活に打ち込んできた甲斐もあり、先生からきつく注意されるようなことはなかった。むしろ、最初は響の方が良い音を出せていたが、今では響よりも褒められることが増えたくらいだ。

「でも、私これまで人前に出て何かすることってなかったから、緊張してうまく吹けなかったらどうしようって、すっごい不安なの。」

「そんなこと言うて、ほんまは自信満々なくせに！　分かってんねんで、隠れて家でも練習してること。」

響は唇を尖らせながらそう言った。

「別に隠してないし。不安だからやってるだけだよ。」

響は良くも悪くも能天気なポジティブ人間だから、その言動に腹が立つことがあっても、救われることの方が多かった。

でも、こんなとき、空宙乃だったら自分の気持ちを分かってくれて、励ましてくれるんだろうなと、奏は思った。そして、このコンクールが終わったら、今度こそ空宙乃に謝ろうと心に決めた。

そして迎えたコンクール当日。まるで奏たちのやる気を表したような真紅のジャケットに身を包んで、各自楽器を磨いていた。

「あああ、もう緊張してきた。」

初めてのコンクールでがちがちになっている一年生たちに、先輩は、

「落ち着いて、あれだけ頑張ったんだから大丈夫だよ。」

と、自分にも言い聞かせるようにして励ましていた。

「まあうちは天才やから、初めてのコンクールでも大活躍して、じきに部長にも任命されるんや！」

こんな時でも自信満々な響に少し元気づけられた奏は、ホルンに息を吹き込みながら自分を奮い立たせた。

チューニングをしているとあっと言う間に時間が過ぎて、気が付くと順番が一つ前になった。

「馬杉中学校です。」

舞台裏で耳を澄ませていると、物凄い音が響いてきた。

「何これ、めちゃくちゃ上手いじゃん。」

本当にこれで勝てるのだろうかと、不安になって隣の響にちらりと目をやると、目が合って耳打ちされた。

「何緊張しとんねん。うちより上手いんやから奏なら大丈夫や。」

気づくと、あっという間に前の学校の演奏は終わり、アナウンスが

流れた。
「次は、音ヶ原中学校。指揮者は菅原律人(りつと)です。」
奏は、手汗と共に拳を握りしめながら歩きだした。
張りつめた空気を切り裂くように菅原が指揮棒を振った。
その瞬間、一斉に音が鳴りだした。広い館内に深く響いた音が、何層も何層も重なり合って一つの音楽として成立していた。
奏もここでその音の一つとして加わっている。
……はずだった。音が、出なかった。いや、出せなかった。もし失敗して、自分のせいで負けたらという恐怖に押しつぶされて、音を出すことができなかったのだ。あまりに完璧な一体感だったゆえに、奏にとっては逆に重い鎖になってしまった。
そのまま一音も鳴らすことができずに、あっと言う間に時間が過ぎていった。
その後、金賞を受賞したことも、見事一位に選ばれたことも、呆然とした奏の頭では整理しきれず、何が何だか分からぬうちにバスは学校に帰着し、片づけを終えた後、菅原が話し始めた。
「見事金賞、しかも一位！　よくやりました。おめでとうございます。」
菅原が、普段よりも少しばかり自然な笑みを浮かべて拍手をした。
感動的な余韻を残したまま、流れるように解散したところで、ようやく響が話しかけてきた。
「奏、一体どないしたん？　演奏が終わってからずっと様子がおかしいで。特に目立った音は聞こえへんかったけど。」
奏の中で、ようやく張りつめていた緊張の糸がプツンと切れる音がした。響に打ち明けるかどうか迷ったのは一瞬で、それと同時に涙があふれ出てきた。
「響、どうしよう。私……。」
「なんや、どないしたん、急に泣き出したりして。」
「吹けなかった。吹けなかったの。一音、一音も吹けなかったの！音が、音が出せなくて、怖くて怖くてどうしようもなくなって。」
「は？　奏、吹かれへんかったん？　嘘やろ、そんなん？」
奏はうなだれたまま、首を横に振った。
「あんた、アホちゃうん？　何のために今まで頑張ってきたんや。今日吹かへんかったら意味ないやん！」
響の言葉は、耳から聞こえているというよりかは、空っぽになった胸の内側から響いているようだった。それからどうやって家に帰ったのかは覚えていない。気が付くと自分の部屋にいて、布団に横たわっていた。

次の日、奏はこれまでにないほど憂鬱な気分で学校に向かっていた。
「コンクールで好成績を残した君たちならやれますね？　次のコンクールに備えて今のうちから練習しておきましょう。」
と、菅原からびっしり詰まったスケジュール表を渡されて、さらに暗い気分になった奏は、ため息をつきながら教室のドアを開けた。
「おはよう奏ちゃん！」
先輩に笑顔で明るい挨拶をされたので、今の奏にできる精一杯の笑顔を作って挨拶を返した。ところが、笑顔の先輩にがっちりと肩を掴まれてこう言われた。
「奏ちゃんは準備しなくていいよ、どうせ吹かないんだもんね。」
「え？　凛音(りんね)先輩、どういうことですか？」
「どういうことも何もないよ。コンクールの時、一音も吹いてなかったじゃない。」
先輩にはばれていたんだ。吹き真似してたこと。奏の全身からどっと冷や汗が噴き出した。周りの視線が痛い。
「す、すみません。間違えるのが怖くて。」
「分かるよ、怖いよね。でもみんなそれを我慢してるのに、出られな

かった子だっているのに、それはちょっとないよね。」
凛音先輩は笑顔だったが、目の奥が笑っていなかった。どことなく菅原のような冷たさを感じる。
「本当にすみませんでしたっ。」
泣きそうになるのをこらえて歯を食いしばった奏は、荷物をまとめるとドアを閉めた。
家に着いた奏にはもう何を考える気力も残っていなかった。制服姿のままベッドにダイブすると、そのまま深海に沈んでいくように眠りに落ちていった。

次の日、目が覚めた奏は全く部活に行く気が起きなかった。悪いのは自分なのだが、先輩や周りの人たちに何か言われるのではないかと、怖くて仕方なかった。ちょうど夏休みに入ったのをいいことに、奏はそれから何日も休み続けてしまった。
ピンポーン。
「はぁい。え、そら！」
思わず目を見開いてインターホンに目をやると、そこに立っていたのは制服姿の空宙乃だった。喧嘩してからずっとギスギスしたままだったので、まともに喋るのはすごく久しぶりだ。
「急に訪ねてごめんねぇ。あれからずっと話せてなかったから、久しぶりに話せて嬉しいよぉ。」
あんなひどいことをしたのに、空宙乃は全く気にしていない様子で、いつも通りのおっとりとした口調で話してくれた。にこにこと笑う空宙乃を見て、奏の口から勝手に言葉が飛び出た。
「あの時はほんとにごめん！　そらっていつも私に合わせてくれるから、本当に自分のやりたいことをしなくていいのかって不安になっちゃって、感情的に怒鳴ったりして。それで、そらに嫌われてそうで怖くて、謝れなくて……。」
目を潤ませながらそう言った奏に、空宙乃は優しい笑みを返した。
「全然気にしてないし大丈夫だよぉ。むしろやっと話せて嬉しい。コンクールのことね、響から聞いたんだぁ。」
「あのとき、私、みんなにひどいことしちゃって。」
「大丈夫。誰も奏のこと責めてなかったよ。部長の琴音先輩が、凛音先輩に言いすぎだよってたしなめてたし。」
涙が溢れるのをこらえて目を真っ赤に充血させた奏に、空宙乃はさらに優しく語りかけた。
「それにね、凛音先輩も、きつく言いすぎたかもって落ち込んでたし。」
「そうだったんだ。でも、空宙乃。あんな酷いことした私を庇ってくれてありがとう。」
なんで知ってるのと驚く空宙乃に、奏は目元に浮かんだ涙を拭いながら言った。
「響が連絡してくれたの。みんなが集合してるときに空宙乃が奏のこと庇ってたって。その時、菅原先生も私のことフォローしてくれてたんでしょ？」
「そうなの。あの菅原先生も意外と優しいとこあるんだねぇ。」
しばらく喋ってから空宙乃が帰った後、奏の心にあったもやもやはもうすっかりなくなっていた。
奏は雲一つない真っ青な夏空をちらりと見上げてから、明日から部活に戻るために、楽譜が入った分厚いファイルを鞄に入れ直した。

翌朝。久しぶりに空宙乃と登校すると音楽室に集まった全員の視線が奏に集中した。
「奏のアホ。戻るのが遅いねん。」
と、笑いながら飛びついてきた響を笑って躱しながら、音楽室にいない先輩に謝りに行くため、まずは部長の琴音先輩がいるフルートの部屋へと足を運んだ。

白桃のように白くてほんのりピンク色の肌に、長いまつげ。栗色の柔らかな髪と瞳が特徴の琴音先輩は、今日はポニーテールにして窓辺に立っていた。先輩の華奢な後ろ姿を見つけると、奏はすぐさま駆け寄った。

「迷惑かけて本当にすみませんでした！」

息を切らしてそう言うと、先輩はぱっちり二重の大きな目を細めてふんわりと笑った。

「気にしなくても大丈夫だよ。県のコンクールには奏ちゃんの力が絶対必要だから、また一緒に頑張ろうね。」

どんなにきつい言葉を投げかけられても仕方がない立場なのに、全く責める気配のない琴音先輩の優しさに、また目が潤んできてしまう。

「それから、凛音なら、奏ちゃんが来たのを知って女子トイレに逃げていったよ。でもね、凛音ったら相当気に病んでるみたいだから許してあげて欲しいな。」

「はい！　もちろんです。」

ぶんぶんと首を大きく縦に振ると、先輩はまた笑った。奏はお礼を言ってから、走って女子トイレへと向かった。

「凛音先輩？　あっ。」

中に入るとすぐ、鏡の前に立って前髪を整えている先輩を見つけた。

こちらを振り返った先輩はまじまじと奏を見ると、無言でまた目を逸らした。

「凛音先輩、本当にすみませんでした！　先輩たちが凄く頑張ってるのを知ってたから、私のミスで台無しにできないって思うと、怖くて、緊張してしまって……。本当に、本当にごめんなさい。」

そう言って奏が深く頭を下げると、先輩のため息が聞こえた。

「別に。私も言い過ぎたし。お互い様だからそんなに謝らなくてもいいんじゃない。」

ぶっきらぼうな声に頭を上げると、ばつが悪そうな顔でそっぽをむいた凛音先輩の顔が見えた。

「いえ、私のために叱ってくれてありがとうございます。迷惑かけちゃいましたが、これからもまたよろしくお願いします！」

鏡越しに見た凛音先輩は、口元に笑みを浮かべていた。

それからまた県のコンクールに向けて猛練習の日々が始まった。奏はついていけるか不安だったが、これまで打ち込んできた成果もあって、何とかついていくことができた。

もちろん毎日の練習はきついが、響や空宙乃、そして吹奏楽から離れているときの方がよっぽど辛かった。

奏は、次こそは絶対に吹ききるぞと誰よりも熱心に練習に取り組んでいた。

「奏、また吹きマネするんちゃう～？」

響があの時のことを未だにからかってくるのは癪に障るが、それが逆に次こそは絶対に演奏しきってやるという覚悟につながった。

「そら、響、早くしないと先に帰るよ。」

奏と空宙乃と響は、気が付くと毎日一緒に帰るほど仲良くなっていた。

「明日はついにリハーサルだねぇ。奏、ちゃんと吹けるぅ？」

「そうやで奏、リハーサルやからって油断したらあかんで。まあ、うちは油断しとっても超上手く吹けるけどな。」

「分かってるし。響の方がよく注意されてるくせに。うるさいな。」

「そらはこの中で一番うまいからねぇ。醜い争いはやめなよぉ。」

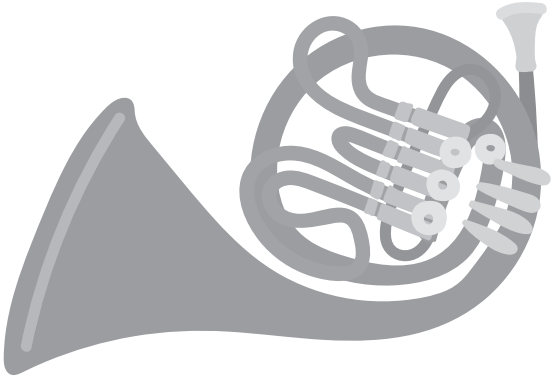
ついにはこんな軽口も叩き合えるようになっていた。奏は空宙乃とこんな風になんでも言い合えるようになったのが嬉しくて、思わずにやけてしまう。

「なんでニヤニヤしてんねん。気持ち悪い奴やな。」
響に関しては、正直に言いすぎている気もするのだが……。

そしてリハーサルは問題なく終わり、いよいよ本番を翌日に迎えた夜。楽器のメンテナンスや楽譜の整理をしているとあっという間に就寝時刻になった。奏は期待と興奮で逸る胸を抑えながら眠りについた。

翌朝、奏はいつもより入念に前髪を整えて、アイロンをかけたパリパリのジャケットを羽織って家を出た。
「どうや、緊張しとるんちゃう？」
「全然大丈夫だし。そらは大丈夫？」
「そらも全然大丈夫だよぉ。絶対金賞とろうねぇ。」
バスに揺られながら奏は深呼吸をする。不思議と緊張はしていなかった。今回こそは良い演奏をしてみせる、と奏は意気込んで拳を握りしめた。
他校の演奏を聴きながら舞台裏で待機していると、ガッシャーン!!
館内に大きな音が響いた。驚く一年生をなだめて先輩がポツリと言った。
「あんな風に楽器を落とさないように気を付けて。この学校もかわいそうに。」
今までやってこなかった緊張が、今になってようやく来たようだった。そうか、当たり前だから気にしていなかったけど、楽器を落とすのも駄目なんだ。
奏は今更不安になりかけたが、ピカピカに磨いたホルンを抱いていると、アナウンスが流れるころには落ち着きを取り戻していた。
「次は十六番。音ヶ原中学校です。指揮者は菅原律人です。」
演奏はフルートとトランペットで始まった。
木管の柔らかな音と金管の鋭い音が絶妙なバランスで響き合っていた。
ここの旋律だ。ユーフォニアムとホルンが全体を支える重要なパート。ここを上手く吹けるかどうかに掛かっている。
必死に指と肺を動かしながら、目まぐるしいスピードで進む楽譜を目で追う。失敗することなんて考えている暇もなかった。
すっと、菅原が指揮棒を下した瞬間、時が止まったかのように館内が静まり返った。そして一瞬の後、会場は割れんばかりの拍手に包まれた。
そのまま急いで楽器と楽譜を抱え、舞台袖へと下がった。
「みんなお疲れ様でした。今までやってきたことを全てぶつけることができたと思うし、私としても素晴らしい演奏だったと思います。ただ、それを判断するのは審査員なので、今から審査のホールへ移動しましょう。」
と、部長の琴音先輩が言った。
珍しく響も神妙な面持ちで歩いている。
「奏の音、聞こえてたよぉ。あんなに吹けるんなら最初から吹けばよかったのにぃ。」
横をすれ違った空宙乃が奏にそう囁いた。
「ほんと、そらも言うようになったよね。」
と、奏もうれしそうに囁き返した。
やり切った気持ちでいっぱいの奏たちを前に、サンタさんのような白いあご髭をたくわえた小太りの男性が挨拶をすると、ステージの机の上にトロフィーが並べられた。
奏は、順番に学校名が告げられるたびに手を握りなおした。
「十四番、御嵩（みたけ）中学校。ゴールド金賞！」
ついに、金賞のトロフィーは最後の一個になった。
「十五番、小笠原中学校。銀賞！」
いよいよ自分たちの学校の番だ。奏は固唾を飲んでアナウンスを

待った。
「十六番、音ヶ原中学校。ゴールド金賞！」
歓声が上がった。奏は強く握っていた手を、さらに強く握りしめ、周りを見た。喜びに手を取り合っている先輩、顔をくしゃくしゃにして泣いている先輩、そんな先輩を見て、同じように涙を浮かべて手を取り合っている後輩。
「みんな、この日のために頑張ってきたんだもんね。」
つい小さく漏らすと左からは響、右からは空宙乃に顔を覗き込まれた。
「やったねぇ。ついに金賞とったねぇ！」
「やったな、ゴールド金賞やって！」
「吹奏楽部に入って、本当によかった。」
三人は思わずハイタッチした。そして、ホールが静寂を取り戻した後、司会者は最優秀校を、つまり全国大会へ進む一校を発表した。
「今回のコンクールに出演した学校の中で最も優れた演奏をしたのは……。」
会場にいる全員が息をのんで次の一言を待った。
「十六番！　音ヶ原中学校です！」
「嘘……。やったぁ！」
司会者が拍手をすると、ホールにいる全員が音ヶ原中学に拍手を送ってくれた。その日一番大きな拍手喝采の中、さっきは泣いていなかった琴音先輩と凛音先輩が涙を流して抱き合っている姿が見えた。その後ろにいる菅原先生が一瞬目元を拭ったように見えたのは、気のせいだろう、たぶん。
表彰式を終え、バスに乗って学校へ帰っているときも、みんな興奮が収まらない様子だった。
「すごいよ、金賞だけじゃなくて一位までとるなんて！」
「本当に。頑張ってきてよかった。」
みな口々に喜びを語り合っていた。隣に座っていた空宙乃も、うれしそうに奏に話しかけてきた。
「本当によかったぁ。それに、これでやっと夏休みに入れるしねぇ。」
そう言われてみれば、奏は数日休んだものの、みんなは夏休み中も一日も休みなく部活に励んでいたのだ。明日からはお盆休みで、夏休み後半は吹奏楽部も休みの日が多くなる予定だった。
「そうだね。ねぇ、夏休み中にさ、響も誘ってみんなで遊ぼうよ。」
「いいねぇ。買い物に行ったり、プールに行ったり、これまでできなかったこと、たくさんしよう。」
夏休みが終わったら、今度は全国コンクールに向けた追い込みが始まるのだ。ほっと一息つけるこの期間を、大好きな友達と過ごせるのかと思うと、奏は今から楽しみで仕方がなかった。
学校に戻り片づけを終えると、音楽室に集まった部員全員を前にして、菅原が語り始めた。
「みんな本当によく頑張りました。」
いつもとはどこか違う穏やかな語り口に、菅原の笑顔もこの日だけは柔らかく感じられる。部員もみんなにこやかな表情で菅原の話を聞いている。
「しかし、これで満足してはいけません。全国大会への切符を掴んだからには、県代表の名に恥じぬ演奏をしなければなりません。」
さっきまでの雰囲気から一転、いつもの調子で語る菅原に、部員の表情に一気に緊張が走る。菅原の表情はやはり感情の見えない冷たい笑顔だ。
「つきましては、お盆休みを短縮し、夏休み後半も毎日練習することとします。全国に向けてこれからが本番！　練習すればするほど勝てる確率は上がっていきますから。」
奏と空宙乃は、顔を見合わせた。泣いているような、笑っているよ

うな、なんとも言えない複雑な表情をしている空宙乃を見て、きっと自分も同じ顔をしているのだろうなと思う奏であった。

〈完〉